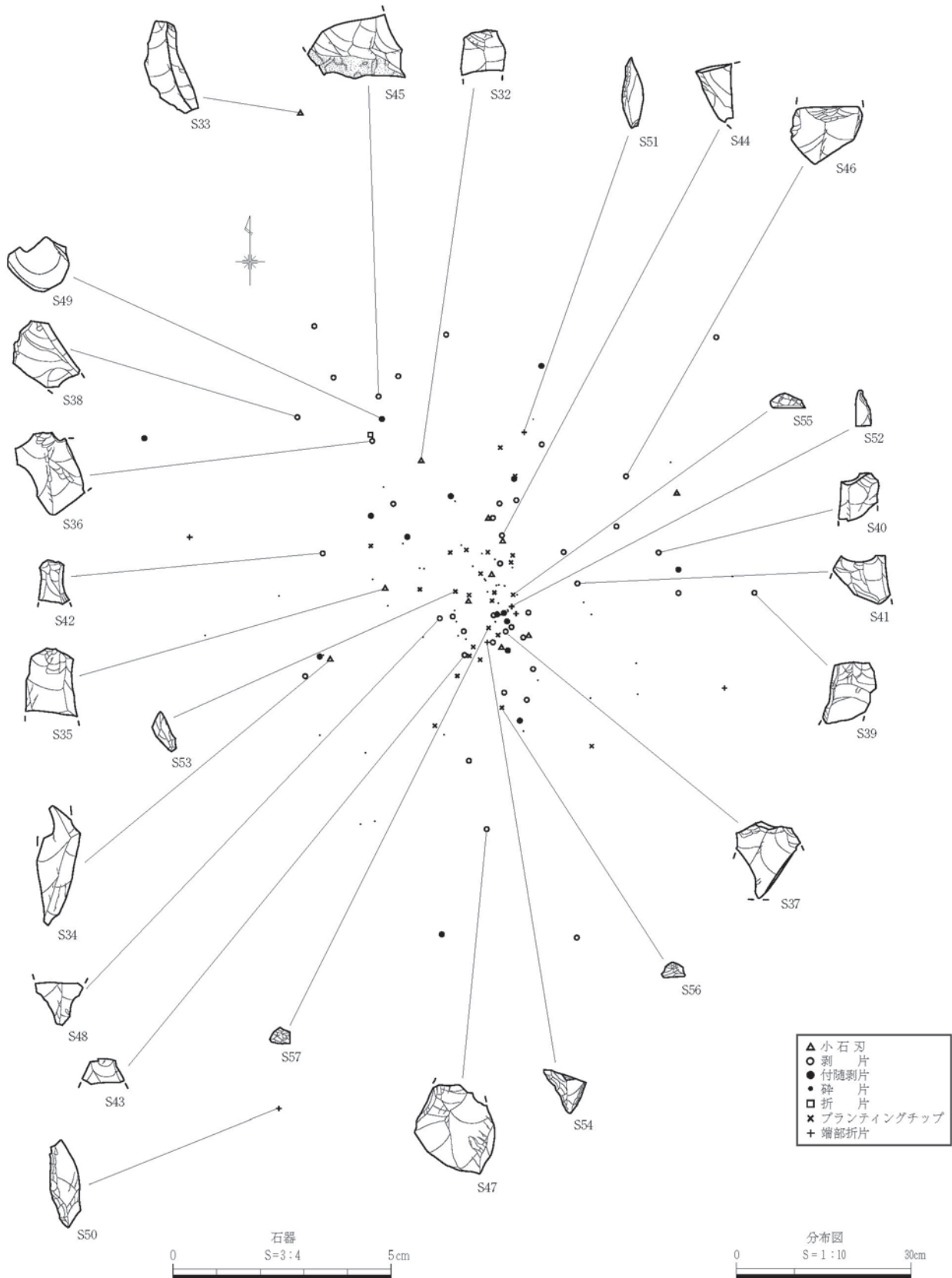


第82図 ブロック1 母岩1 接合資料分布状況



第83図 ブロック1 母岩1 非接合資料分布状況

母岩2 (第84図 PL.58)

赤色で珪化が強く透明感に富む玉髓で、小さな板状の礫と考えられる。11点が属する。

個体2-1は5点の接合資料。板状の礫をひっくり返しながら平坦面を打撃して、折片(S58)や小さな横形剥片(S59~S62)を取る。剥片があまりに小さいので、目的的に取ったものとは考えにくい。本格的な剥片剥離作業に先立って素材の不規則部分を除去したものであろう。

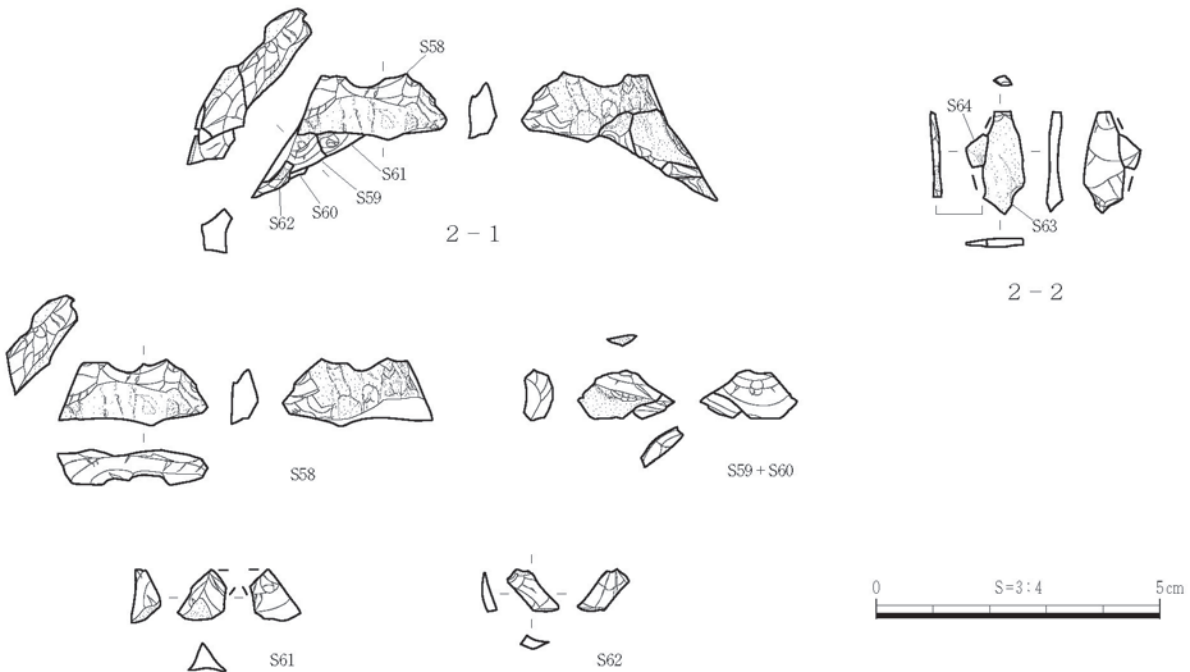
個体2-2は背面が全礫面となる剥片が折れたもの。個体2-1の作業後に取られた初期の目的剥片であろうか。

母岩2の分布状況を第85図に示す。多くが剥離の座の周囲にあることから、母岩2の割り手は母岩1と同一で、一連の作業と考えてよいであろう。S58やS59などの母岩2の中では大きめの剥離物が座を離れていることから、我々には利用価値がないように思える小さなものでも、何らかの有用性が認められることがあったと考えるべきかもしれない。

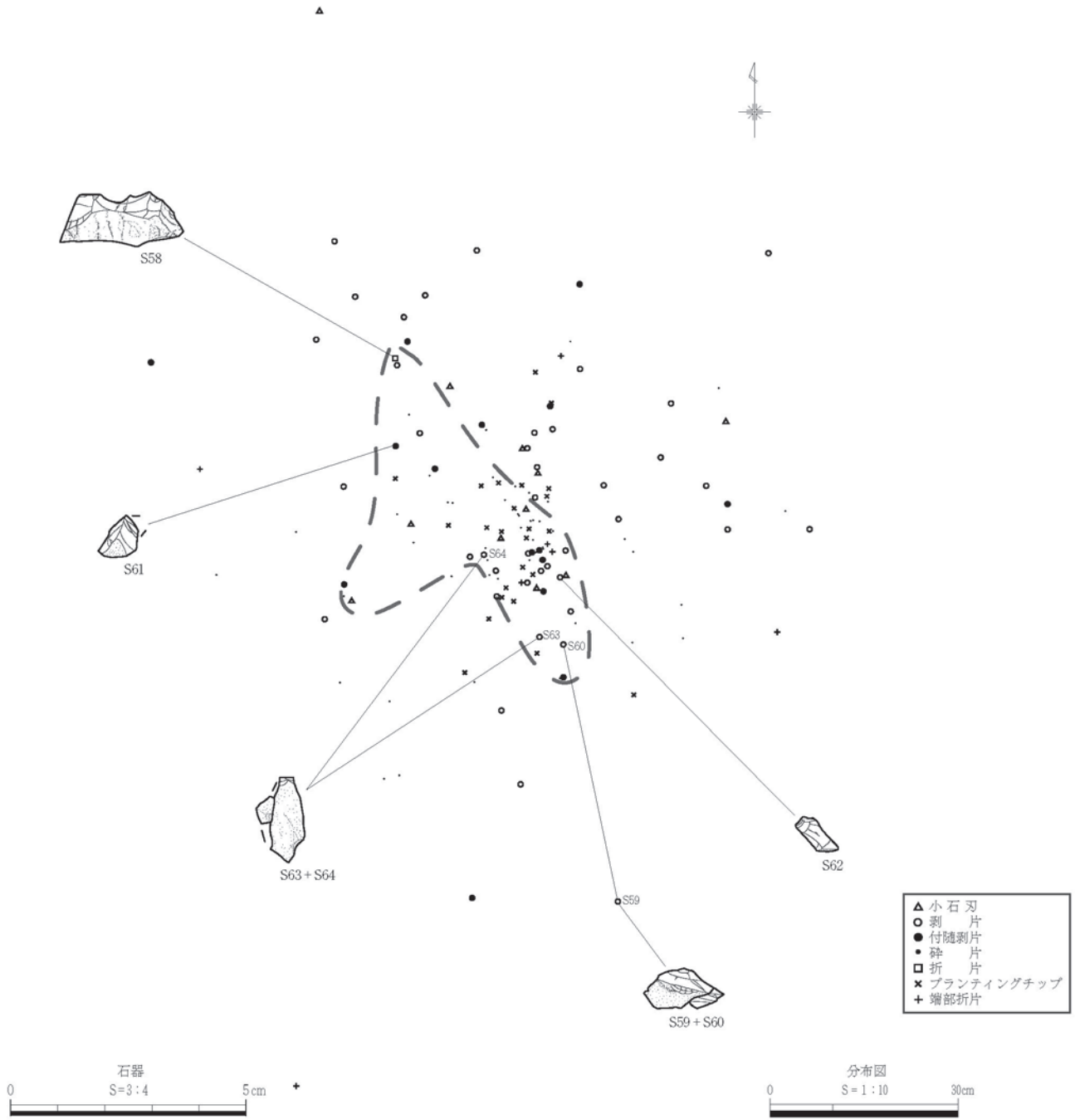
母岩2の作業は、初期の石核調整が中心である。石核がないので、母岩1と同様に遺跡外に搬出されたと考えられるが、もともとあまり生産性が見込める材ではなかったであろう。二次加工片が存在しないことから、ナイフ形石器等の石器の製作までは行われていないと推定される。

母岩3

赤色で透明感の乏しい玉髓。碎片2点のみのため図示していない。剥片か石器の状態で持ち込まれたものに由来するであろう。



第84図 母岩2 接合資料



第85図 ブロック1 母岩2 石器分布状況

4 ブロック2 (第86図、PL.39～41)

(1) 石器の分布

ブロック1の北東約2.5mの、尾根の稜線上に位置する。標高は64.2mを測り、ブロックの範囲では、地形は南東から北西に向かってわずかに下る。東側には長径2m×短径1mの小さな風倒木痕があるが、剥片が1点出土したのみなので、影響はほとんどないと考えられる。

旧石器は110点が出土し、すべて玉髓製である。層位的な出土状況はブロック1と同様で、AT層の直下から5cmまでの深さの白色ローム層上面付近で出土し、特に2～3cmの深さにまとまっている。出土層位は、地表面からは約80cmの深さを測る。

ブロックの平面形はほぼ円形で、南北112cm×東西110cmを測る。ブロックの中央西寄りには、石器の空白地帯があり、ここには炉跡の可能性をもつ薄紫色の粘土塊の集中がある。石器はブロックの北部に偏在し、長径52cm×短径44cmの楕円形の範囲に、全体の76%が集中する。この中には、剥離の座とみられる部分が2つある。北側の座1は径19cmの円形で28点、南側の座2は22cm×10cmの楕円形で22点の遺物をそれぞれ含み、両者はほぼ接している。

座2の南方には、完成品や有用な剥離物がまとまっている部分がある。32cm×29cmの範囲から、ナイフ形石器5本、石刃1枚、目的剥片1枚、石核1個が出土した。さらに27cm南にもナイフ形石器が1本ある。後述するように、この部分は、ナイフ形石器の交換や、遺跡からの移動前に剥離物を選別する作業が行われた、最終選別・交換の場と推定される。

(2) 石器組成

ブロック2から出土した石器の組成は表40のとおりである。

完全なナイフ形石器が8点含まれていることが、大きな特徴である。石刃に分類できるものが4点あり、剥片にも石刃を意図して剥離されたものが多いことが接合資料の読み取りからわかる。初期の剥片から石核までが残されており、ブランディングチップなど二次加工片も豊富である。素材となった礫片から石刃を剥離してナイフ形石器を製作する一連の作業の剥離物が揃っている。

母岩は2つが識別され、110点中98点が1つの母岩(母岩4)に属する。母岩5に含まれる10点はナイフ形石器の再加工に関連すると考えられるので、ブロック2で割られた石材は、事実上母岩4の1つのみである。

表40 ブロック2組成

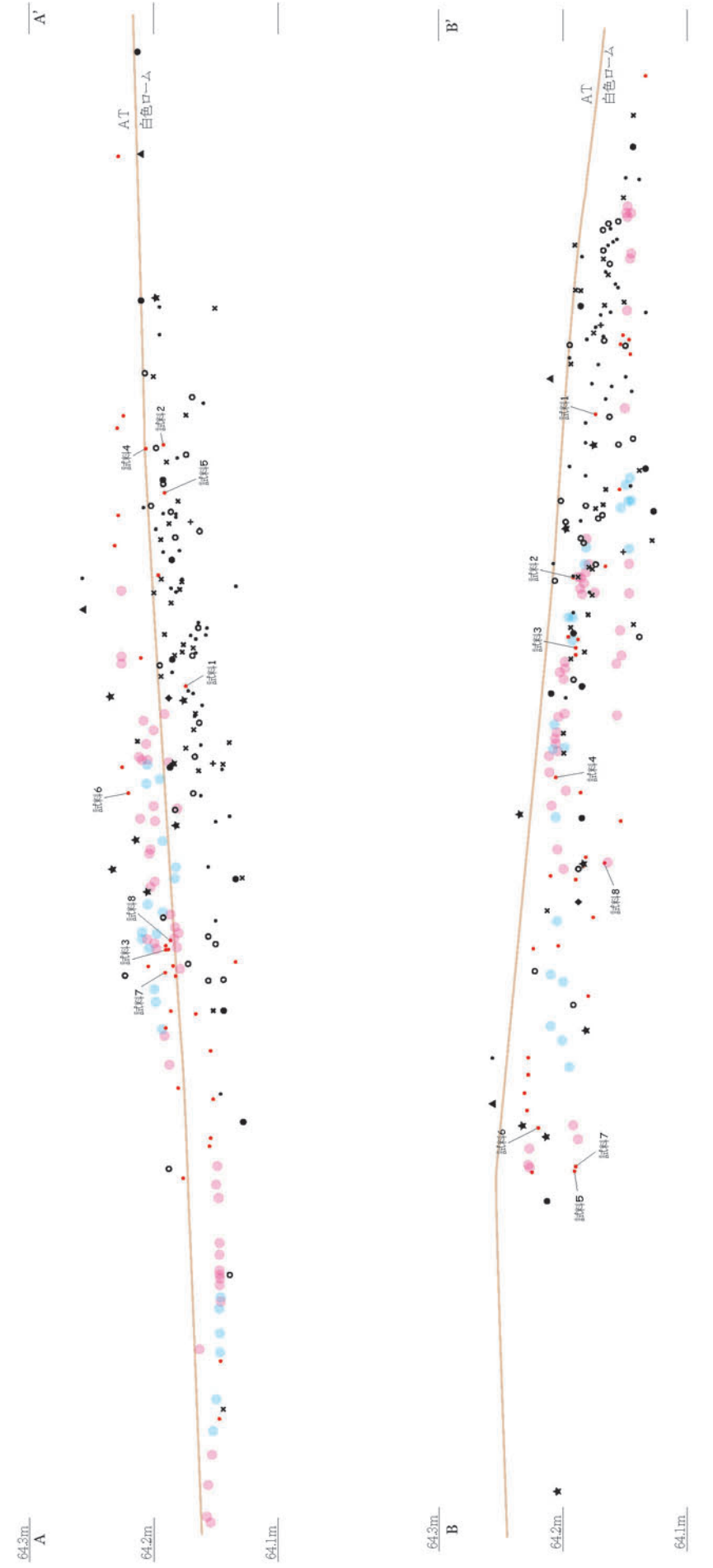
	石器		剥片				二次加工片			碎片	石核	計 (g)
	ナイフ形 石器	二次加工 剥片	石刃	小石刃	剥片	折片	付随剥片	bチップ	端部折片			
母岩4 (g)	6 (8.94)		4 (6.62)		19 (9.54)		8 (16.63)	22 (0.34)		38 (1.00)	1 (70.16)	98 (113.23)
母岩5 (g)	1 (2.06)							6 (0.17)	2 (0.06)	1 (0.01)		10 (2.3)
単独 (g)	1 (1.86)											1 (1.86)
不明 (g)							1 (0.06)					1 (0.06)
計 (g)	8 (12.86)	0	4 (6.62)	0	19 (9.54)	0	9 (16.69)	28 (0.51)	2 (0.06)	39 (1.01)	1 (70.16)	110 (117.45)

Y=72236.5

Y=72236.0



第86図 ブロック2



110点の石器のうち接合関係をもつのは26点(23.6%)であるが、重量0.1g以上のもの33点に限れば、69.7%が接合している。接合しなかったもののうち7点はナイフ形石器なので、ある程度の大きさをもつ剥離物はほぼすべて接合したことになる。

(3)炭化物集中(第86図、PL.39)

ブロック2には炭化物集中が伴う。炭化物は76点を検出し、ほとんどが径2mm以下の小さな炭粒である。集中の範囲はブロックの範囲に概ね重なり、ブロック外には広がらない。分布状況は散漫で、明瞭な集中部はもたないものの、粘土塊集中の付近に偏在する傾向が認められる。その一方で、剥離の座を中心とする剥離物の集中範囲からは、炭化物はほとんど出土していない。

粘土塊が環状に集中する、炉跡の可能性のある部分の内部には炭化物は存在しない。しかし、後述するように、これは後世の根あるいは火山灰の影響によるもので、本来の状況は不明である。

比較的大きなものを中心に、8点の炭化物について放射性炭素年代をAMS測定した(第9節)。炭化物の中には、元々白色ローム層のより深い部分に存在した古いものや、逆に、大山ホーキ火山灰に関連してもたらされた新しいものが含まれることが想定されたこともあり、測定試料については、出土状況を重視して、剥離物集中・ナイフ形石器等の集中・石器分布の空白部・粘土塊集中の周辺・粘土塊に包含されるものを選んだ。測定結果は7点について得られ、暦年較正年代で30745~29243 cal BPという近似の年代であった。特に、剥離物及びナイフ形石器等の集中から採取した3点については、29,500年前前後のほとんど同じ値が得られている。粘土塊周辺とその内部の2点は、30,000年以上前の若干古い年代を示しているが、誤差の範囲と考えるとよいであろう。以上から、炭化物集中を構成するそれぞれの炭化物は、ほぼ同時のもので、ブロック2の形成と関連していると推定できる。

(4)粘土塊集中(第87図、PL.40)

ブロック2の範囲では、薄紫色を呈する固く締まった粘土塊が各所で検出された。粘土塊は径1~10cm程度の塊状で、表面には凹凸があり、内部まではほぼ均質である。表面近くに炭化物を含むものが1点あったほかは(放射性炭素年代測定試料8)、炭化物や石器等の遺物は含まれていない。AT層を除去するとすぐに確認でき、深さ4cm程度で消失する。つまり、層位的には炭化物や石器とほぼ同じ出土状況を示すが、若干高い位置からも検出される。岡山大学名誉教授 稲田孝司氏から、これらの粘土塊は、白色ローム層が被熱して変色したものの可能性があるとの御指導をいただいた。

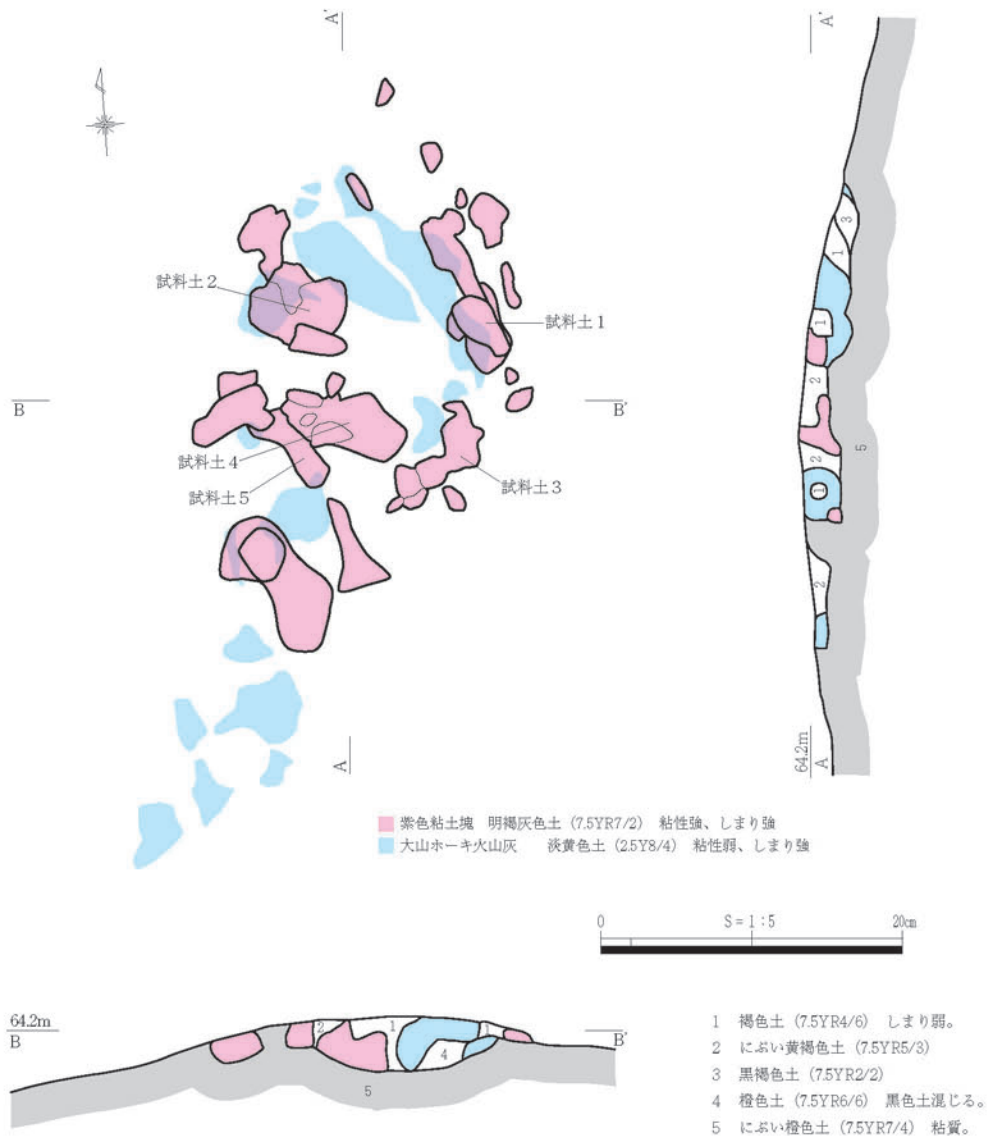
粘土塊が特に多く見られるのは、ブロック中央の西寄り部分である。長径33cm×短径20cmの範囲に、大小の粘土塊が環状に集中する。上述のように、この範囲には石器が分布しない一方で、周辺からは炭化物が検出される。粘土塊がない中心部分は、15cm×7.5cmの長楕円形で、ここには炭化物等はなく、大部分は大山ホーキ火山灰で満たされ固く締まる。この火山灰の集まりは、全体としては管状で、年輪様の縞模様を呈する部分があり、北から南に向けて粘土塊の下に潜り込んだ後に、粘土塊集中の南側に抜ける。このような状況から、粘土塊集中を貫いて走っていた横根に、火山灰が置き換わったものと考えられる。なお、調査地内には、大山ホーキ火山灰の一次堆積層はなく、この場合と同様に、小さな根穴を充填したものがわずかに確認できるのみである。上のホーキであるか下のホーキであるかは不明であるが、いずれにせよATより新しいもので、ブロックの埋没後に形成されたことに疑いはない。

第5章 豊成叶林遺跡の調査

問題は、粘土塊集中が、横根あるいは火山灰の侵入によって形成されたものであるかどうかである。両者の範囲の一致から、その可能性は否定できないが、ブロック北西部のように粘土塊と火山灰が一致しない場合があることや、ブロック南部のように粘土塊が単独で存在する例があることから考えると、粘土塊の形成は火山灰とは関係しないと考えてよさそうである。もちろん、横根あるいは火山灰によって粘土塊集中の形状等が変化している可能性はあり、本来は環状ではなく楕円形や円形であったかもしれない。

粘土塊について、内包される角閃石の屈折率を計測することで、被熱履歴の探査を行った。第9節に示すように、結果は不明確であった。基盤の白色ローム層中には、もともと酸化角閃石が大量に含まれているため、この方法による探査には、本遺跡の場合は限界があると考えられる。

なお、ブロック2から出土した石器の中に、明らかに被熱により変色したと考えられるものは認められなかった。石器が主に分布する範囲に炭化物がほとんどないことを考慮すると、石器が被熱する機会自体がなかったのであろう。



第87図 粘土塊集中

1)周囲に炭化物が分布すること、2)粘土塊集中の部分には石器がないこと、3)粘土塊集中に接して、剥離の座と選別の場という異なる機能の場が、取り囲むように設けられていることなどの、状況証拠から見ると、粘土塊集中の付近に火処が存在した可能性はかなり高い。しかし、粘土塊集中そのものを炉床土とみなすことができるかは、粘土塊の形成と変色のメカニズムが不明である以上、判断が難しく、今後の検討課題である。

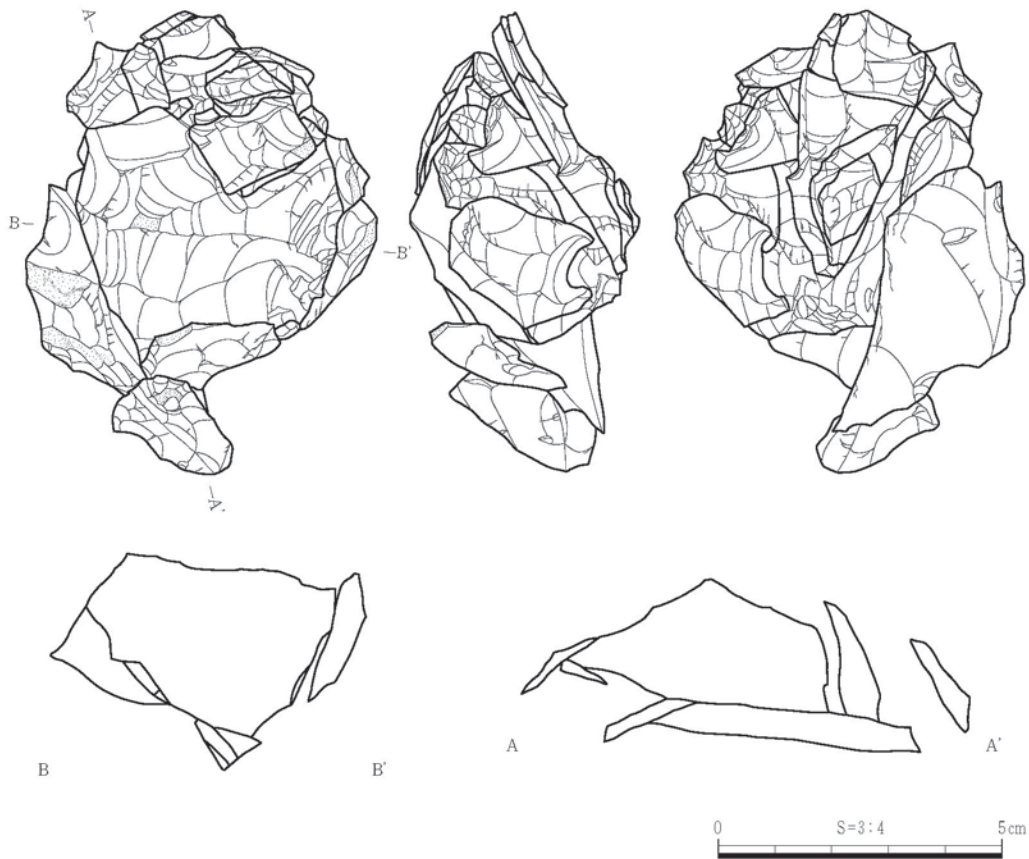
(5)出土遺物

母岩4 接合資料(第88～93図、PL.59・60)

ブロック2から出土した石器は、周辺から出土した3点を加えて計29点が接合し、ひとつの接合資料を構成する。内訳は、石核1点、剥片類25点、碎片2点、ナイフ形石器1点である。

接合資料を分解して読み解くと、剥離作業が石核の変形にしたがって4段階を経ていることが理解できる。以下に順を追って記述する。

素材(第89図) 用いられた素材は、長さ8cm以上、幅約8cm、厚さ約4cmの玉髓の礫片で、素材面の観察などから、第89図のように復元できる。A面は平坦な礫面である。B面は節理面で、C面側の角には突出部が付着する。突出部の割れの状況等からみると、B面は人為的な分割面ではないと思われる。側面の状況は、C面が礫面であるほかは不明である。全体のボリュームはDE角が最も厚い。石質は概ね均質で、CF角に突出部に関連する潜在ヒビが、BD角に粗粒の部分が認められるほかは、目立った欠点はない。初期の作業に由来する比較的小さな剥片が接合しているので、剥離をほとんど

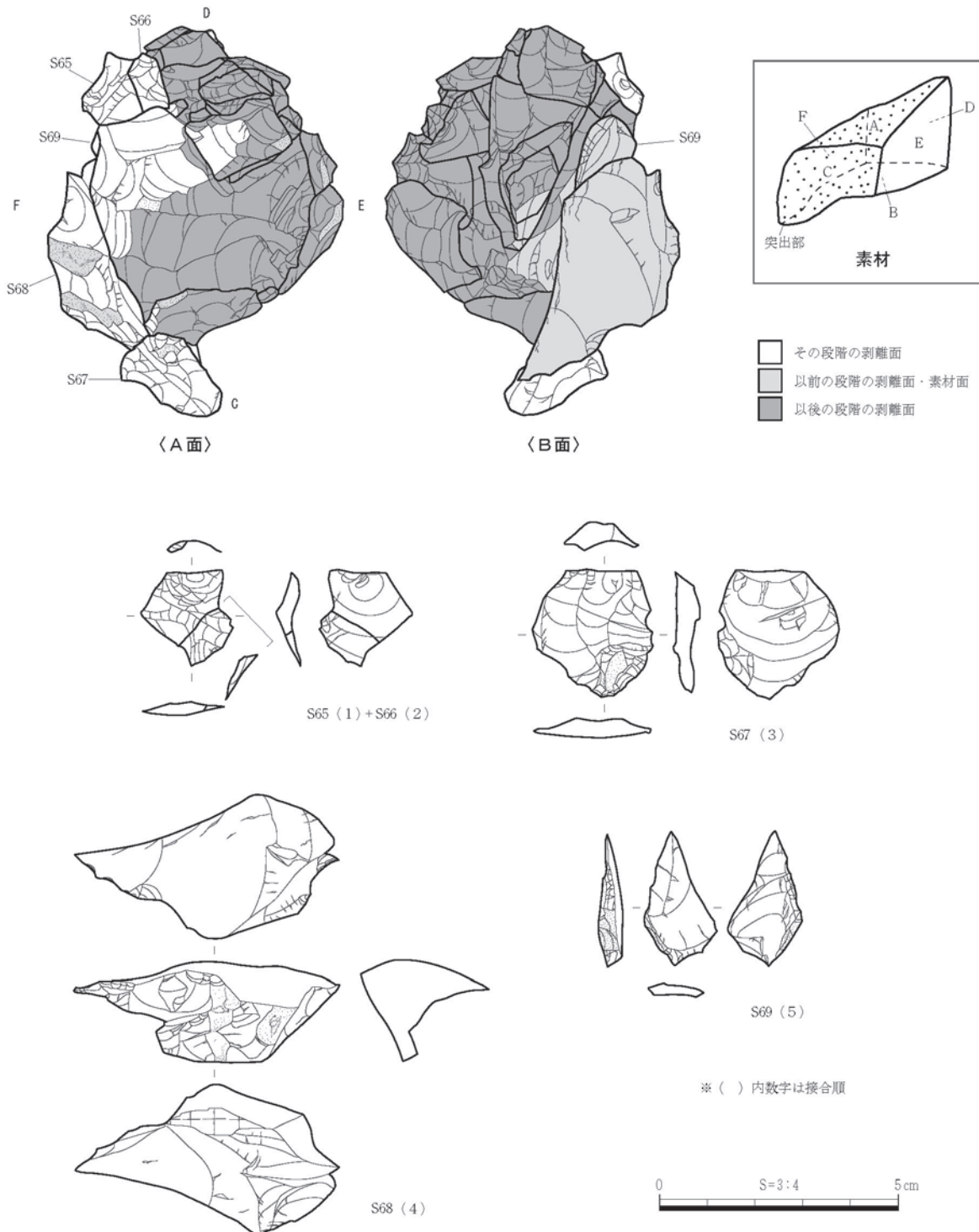


第88図 母岩4

受けていない、素材に近い状態でブロック2に搬入されたと考えられる。

段階1 (第89図) まず、A面を作業面を選び、求心的に剥片を剥離する。平坦な礫面であるA面は、作業面としては決して良好ではないが、B面側の不規則性に比べれば許容できたのであろう。

E・D面に打撃可能な箇所があった初期には2～3枚の縦長剥片が取れているようである。しかし、やがて角度の問題で、B面しか叩けなくなり、作業面が側面側に傾斜して、目的剥片S65+S66のよ



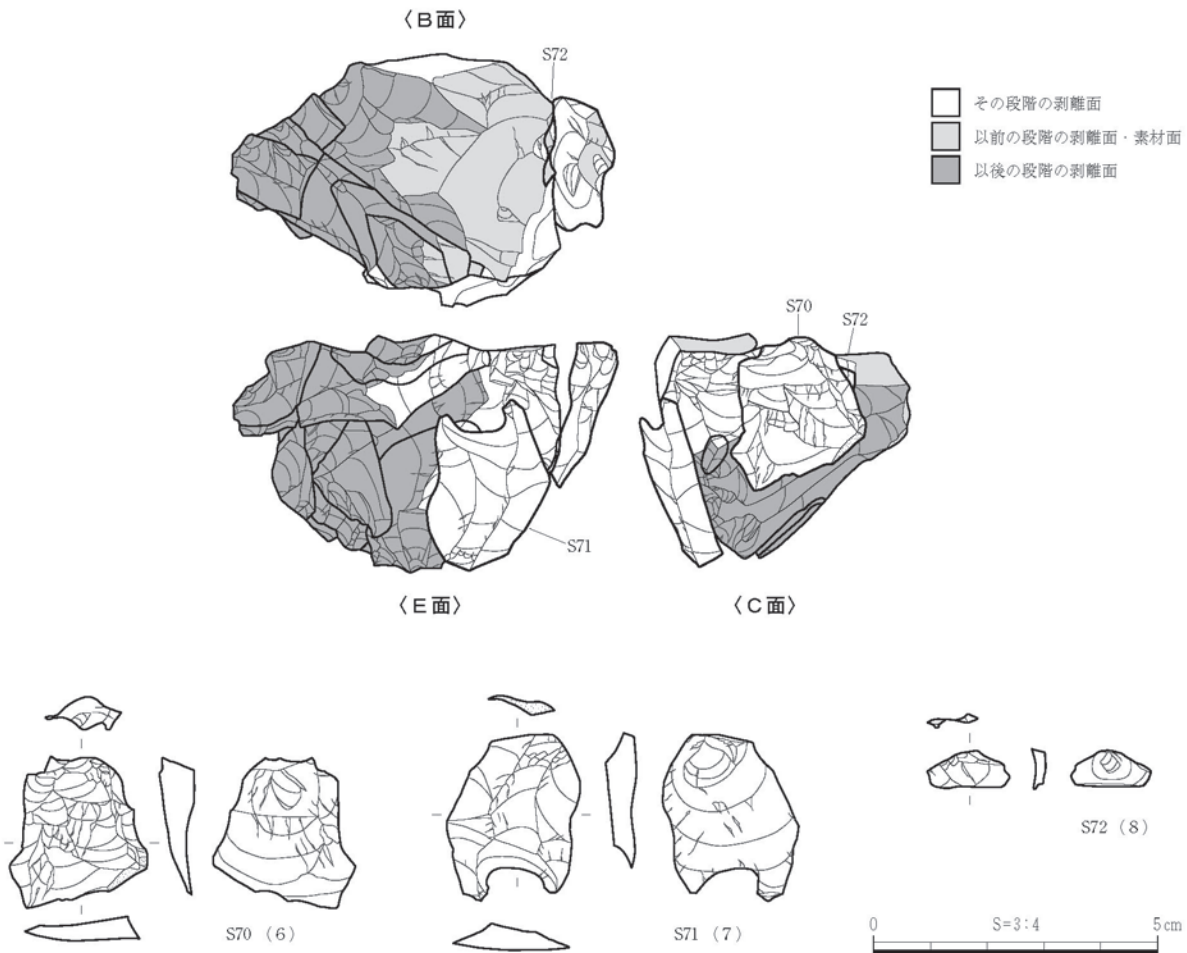
第89図 母岩4 段階1

うに、取られる剥片は短形となる。作業後半では、主にB面の突出部を打面として打撃を繰り返す。ここで取られたS67は、末端に二次加工が施され、ブロック周辺に持ち出される。ある時点で節理面から突出部が剥落して(付随剥片S68)、この段階の作業は終了する。なお、この際に同時に取れた付随剥片は、鋭い縁辺をもち尖っていたため、ナイフ形石器S69に仕上げられる。S69は素材を大きく変形せずに1側縁に部分的に背部整形を加えるもので、本遺跡のナイフ形石器の中では異質なものである。付随剥片を素材とすることと合わせれば、便宜的なものと考えてよいであろう。

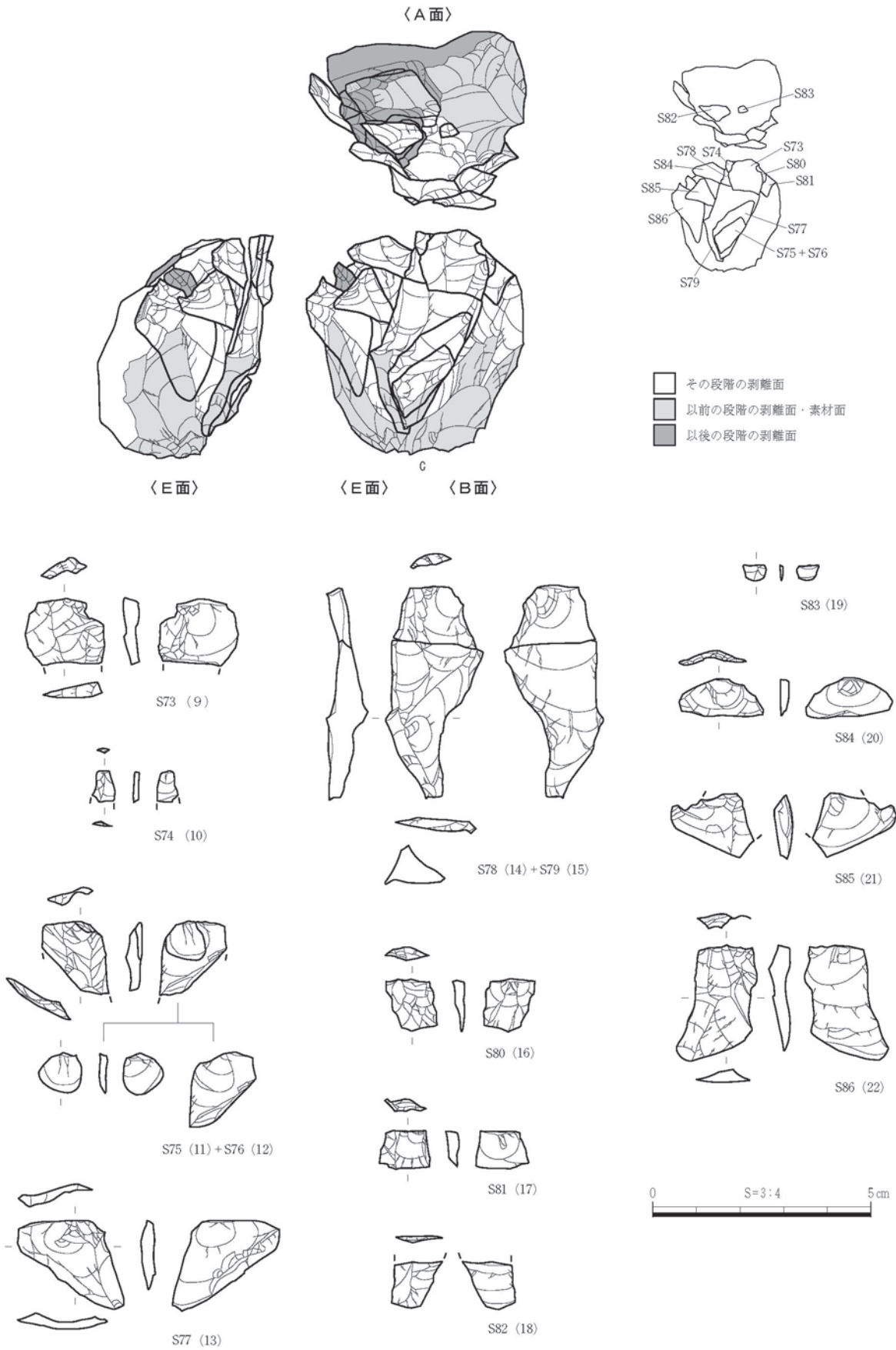
段階2(第90図) 障害物であった突出部が偶然取り除かれB面が平坦になったので、これを打面に利用し、CE角から徐々に作業軸を厚みのあるE方向に振りながら、目的剥片を剥離する。初期に取られた剥片は、目的剥片S70のように、段階1の後半同様短形のものであるが、やがて石刃を取ることが可能になる。この接合資料において、良好な石刃を最も多く生産したのはこの段階である。

石刃の剥離作業は、E面を作業面とし、B面に打点を選ぶ単方向を基本とする。しかし、作業面に悪状況が生じた場合には、対向するA面を副打面に利用する。その典型が調整剥片S71で、主打面からの剥離が反転してできた作業面上のくぼみを、副打面からの2度目の剥離で除去することに成功した時のものである。

接合した剥片は2枚のみであるが、剥離面や空隙の読み取りから、10枚程度は良好な石刃が生産されていると推定される。非接合の石刃S113(第97図)は、末端にA面と同じ特徴の礫面をもつので、



第90図 母岩4 段階2



第91図 母岩4 段階3